【英語科教育学Ⅷ　期末レポート論文①】
担当：Y.H.
ARELE Vol.20 pp.51-60

Changes in Speaking Performance of Japanese High School Students: Longitudinal and Cross-Sectional Studies at a SELHi

Abstract

この論文ではスーパーイングリッシュランゲージハイスクール（SELHi）における高校一年生から三年生までのスピーキング能力の発達を縦断的、また短期間を断面的に測定する。39 人の生徒を長期的に測定し、118 人の生徒を短期的に測定した。結果、流暢さが先に進歩し正確さはあとから進歩することが分かった。

1. Introduction

近年の研究ではどのように日本人学習者のスピーキング能力が進歩するかが測定されている。しかし縦断的な研究と断面的な測定の二つを組み合わせて行った研究はこれまでに日本でなされていない。生徒のスピーキング能力は三年間を通じてどのように進歩するのか。

2. Method

2.1.Participants in the Longitudinal Study

SELHi の英語コースの生徒 39 人が通算３回スピーキングテストを受ける

2.2. Participants in the Cross-Sectional Study

SELHi の生徒 40 人（１年生から３年生）がテストを受ける

2.3. Speaking Test and Procedure

生徒は写真を説明するテストを受ける。縦断的測定は 2004 年から 2006 年に行われ、短期測定は2006年に行われた。テストに用いられる写真は英検２級の問題からの引用である。一分間の準備時間の後、質問者（学校の先生や研究者）に対して回答する。

2.4. Analyses

テープレコーダーに録音された音声を筆者の一人が分析する。15 秒以上の沈黙があった場合、それ以降の発話は分析対象とされない。分析は単語の量と発話時間の長さ、流暢さ、正確さ、統語の複雑さ、語彙の難しさ、の五つの観点からなされる。

3. Results and Discussion

縦断的測定では一年生から二年生にかけては男女ともに上の５つの側面すべてにおいて進歩が見られた。しかし、二年生から三年生にかけては男子生徒には進歩が見られず、女子生徒にも流暢さと正確さのみにしか進歩が見られなかった。一年生から三年生にかけての変化では、流暢さ、正確さ、統語の複雑さ、語彙の難しさに進歩が見られた。

縦断的測定と短期的な測定を比べると、共通点と相違点が分かる。双方に欠点があるため、二つの測定に共通する結論を重視する。

一年生から二年生にかけての結果では流暢さが進歩しているが、一年生から三年生にか

けては正確さが進歩している。生徒はまず、いかに少ないポーズと速いスピードで話すかを学び、次に少ない誤りで話すことを学ぶ。流暢さは最も簡単に進歩しやすい側面であるからだと考えられる。一方、正確さは段階的に伸びていく側面であり、時間がかかる。この研究の他にも、流暢さが先に向上することを測定した研究は見られる。

反対に、正確さが先に伸びるとしている研究も少ないが見られる。それらの研究から、正確さの向上は状況に依るのではないかと考えられる。正確さに焦点を当てた指導がなされること、入学試験のために個人的に学習するなどの要因が挙げられる。

また、この研究で二年生から三年生にかけての能力の向上は限られており、むしろ退化している場合も見られた。これはある段階に達したときに訪れる停滞期であると考えられる。

4. Conclusion

スピーキング能力における五つの側面のうち、まず流暢さから向上が見られ、次に正確さに進歩が見られることが分かった。

【考察】

この論文で示されている「流暢さが先に向上し、正確さがそれに次ぐ」という事実は実際の教育現場でどのように生かすことが出来るだろうか。

流暢さが最も簡単に伸びやすいということから、高校のコミュニケーション英語の授業などで、まずは誤りを気にせずに会話させるという指導が出来ると考えられる。また、授業内でのペアあるいはグループでの活動において、お互いの誤りには注意を向けさせず、いかに少ない沈黙のもとにコミュニケーションをするかという観点からの評価を行うことで、生徒も流暢さに意識を向けるようになるのではないだろうか。

ただし、流暢さのみが向上して正確さの欠いたコミュニケーションへとつながってしまうというデメリットもあるように思われる。論文でも述べられていたように、正確さを向上させるためには正確さに焦点を当てた指導が必要である。コミュニケーションの授業では流暢さを重視し、その他の授業で文法事項などの正確さに焦点を当てることで、不正確な英語の流暢さへとつながるのを防ぐことが出来ると考えられる。

【英語科教育学Ⅷ　期末レポート論文②】

担当：Y.H.

ARELE Vol.21 pp.121-130

The Influence of Foreign Accent

on the Listening Comprehension by Japanese EFL learners

Abstract

英語の外国人訛りがリスニングにどのように影響するのかを研究する。日本人大学生を対象に、容認標準発音（RP）と母語がヒンディー語である人の話す英語を使ってテストを行った。日本人大学生を二つのグループ（上位群、下位群）に分けてテストを行ったところ、下位軍では RP とヒンディー語母語話者の英語両方に低い理解を示したが、上位群ではとりわけヒンディー語訛りの英語に対して徐々に理解を示す傾向が見られた。また、理解においては上位群、下位群共に RP の方が理解しやすいことが分かった。

1. Introduction

英語は他国の者同士のコミュニケーション手段として広く用いられているが、母国語による訛りによって理解が困難になる場合が多く見られる。教科書などでは一般的に RP が使われているが、ALT の出身国は多様である場合が多いことから日本人学習者は訛りのある英語を聞く機会も多い。訛りのある英語が学習者にどのような影響を与えるかを調べ、得た結果からどのようなアクセントが指導に効果的であり、英語に準じたコミュニケーションを促進するのかを考える。

2. Literature Review

1940 年代から 50 年代にかけて広まったオーラル・アプローチではネイティヴに近い発音の指導が重視されていた。しかし 80 年代にコミュニカティブ･アプローチが普及すると、ネイティヴに近い発音より理解可能性に重きを置くようになった。数ある先行研究をまとめると外国人訛りは必ずしも理解を妨げる要因になるわけではないと述べられているが、それらの研究では英語熟達度の高い協力者の結果のみしか用いられていない。この研究では英語の熟達度に関わらず、外国人訛りの英語が日本人の英語理解にどの程度影響を及ぼすのかを調べる。

3. Experiment

3.1. Selecting a Foreign Accent and Recruiting Speakers

母語がヒンディー語で、イギリスに滞在（一年未満）している話者を協力者とする。

3.2. Selecting a Recording Script

難易度の同じ二つの原稿を英検２級から選ぶ。

3.3. Recording Process and Determining the Final Hindi Speaker

録音は UCL の防音室で行う。発話は英検２級と同程度の速度で行う。４人の協力者の中から、相対的に一番ヒンディー語訛りの強い話者を選ぶ。結果、22 歳の女性でイギリスに滞在して二か月の者が選ばれた。

3.4. Subjects

日本語母語話者である大学生 173 人に英検２級の中から 40 問を解いてもらい、その結果から上位群と下位群を選別した。

3.5. Investigative Process

つり合いを取るために上位群を二つに分け、一方には先に RP を聞かせ、次にヒンディー語訛りの英語を聞かせる。もう一方は反対の順番で聞かせる。

3.6. Listening Score that Factors in Level of Confidence

評価の信頼性を高めるためにCOPSシステム（Shizuka, 2001）を用いる。COPSはテストの受験者が自らの回答にどの程度自信があるかを答えてもらうシステムである。自信を持って正解を選んだ受験者は得点が高く、また回答に自信が無く不正解を選んだ受験者も得点が高いということになる

4. Result

上位群の方が高い理解を示し、アクセントに関してはRPの方がヒンディー語訛りの英語よりも高く理解されることが分かった。

5. Discussion

実験の結果から、熟達度の高い協力者（上位群）の方が下位群に比べて訛りの影響を受けていないことが分かる。また、熟達度の高い協力者は問題をこなしていくごとにヒンディー語訛りのある英語に慣れていった。一方、熟達度の低い協力者（下位群）には理解の向上は見られなかった。これは日本語音声によるスキーマのせいで理解が困難であると考えられる。

6. Conclusion

とりわけ熟達度の低い英語話者同士の会話ではBent & Bradlow（2003）で述べられているa mismatched interlanguage speech intelligibility disadvantageが見られる。熟達度の高い学習者であれば訛りの強い英語でも徐々に理解できるようになることが分かった。これまで英語の発音指導に関しては様々な議論が行われてきたが、指導においてはRPやGA, それらに準ずる発音にするのが良いと結論づけられる。

【考察】

この論文で述べられているように、実際の指導においては標準容認発音に準ずるものが良い。つまり、英語が母語であるALTが実際の現場には適しているということであるが、現在の教育現場においては必ずしもALTの母語が英語であるとは限らない。

このことは日本の英語教育にデメリットとなっているように思われるが、とりわけ中学校などの英語入門時期には英語の発音は特に問題ではなく、むしろALTなど異文化や異言語の人と接する姿勢を身につけさせることが大切ではないだろうか。

しかし高校など英語の習熟度が高く、リスニング指導を効果的に行いたいと考えるならば、たしかにRPに準ずる発音の方が適している。ALTの発音によってリスニングの指導の効率性に差が生じることを考慮するならば、その教育の目的に応じてALTの選択も考慮する必要があると考えられる。

【英語科教育学Ⅷ　期末レポート】

The Art of Teaching Speaking pp30-31

担当：Y.H.

Fluency versus Accuracy

スピーキング活動は大きく fluency activity と accuracy activity に分類される。ここで言う fluency（流暢さ）とはタスク内において発した言葉の量であり、accuracy（正確さ）とは文字通りタスク内において発された言葉の正確さのことである。

たしかに正確さは重要であるが、会話クラスの教師は流暢さに焦点を当てた活動を望んでいることが多い。理想を言えば、教師は単に話すことを許し、話すことを促すのではなく、生徒が話すことを必要とされる活動が望まれる。

筆者の体験としてアメリカで大人に授業をしたり日本で子供に授業をしたりという経験が書かれている。実際には学習者はとても忙しく、授業外で学習する時間はほとんどない。また、筆者のテニスでの指導経験から、学習者が初期の段階から正確さを要求されることは非常に苦痛であるということが述べられている。このことから、「指導に加えて実践を行う」ことよりも「実践に加えて少しの指導を行う」ことの方が良いということができる。

英語の授業でいうならば、生徒がより多く、可能な限り発話を行うように促すのが効果的である。また、とにかく流暢さに焦点を当てた活動が非常に重要であると述べられている。生徒がスピーキング能力を向上させるには実際に話すことが大切である。よって、教師の主な役割の一つに、生徒がとにかく可能な限り話すようにすることが挙げられている。

【考察・学んだこと】

スピーキングの授業において、まずは流暢さに焦点を当てて生徒が話すようにすることは教師の重要な役割だと思う。これまでの研究でもスピーキングにおいて学習者はまず流暢さから進歩することが分かっているので、初期の段階ではとにかく話すことが大切である。

また、「指導に加えて実践を行う」よりも「実践に加えて少しの指導を行う」ことは、生徒が主体的にコミュニケーションを行う姿勢を身につけさせるうえでも大切なことであると思う。しかし、流暢さにのみ焦点を当てた指導には問題もあるように思われる。

生徒が誤った語彙、文法のままコミュニケーションを行い、誤った英語が身についてしまう可能性もあるからである。

テキストでは流暢さのみに焦点を当てるのが正しいと書かれていたが、正確さを疎かにしないように教師が常に意識していくことも教師の重要な役割であるように思う。また、「初期の段階では正確さを要求されるのは苦痛である」とテキストにも書かれている通り、流暢さにのみ焦点を当てるのはあくまで学習者が初期の段階に行うべきであって、一定の水準に達してからは流暢さのみではなく正確さも指導していくことが大切であると考える。